

生活の中で活用できる技能を育成する家庭科学習指導の工夫 — パフォーマンス課題を取り入れた衣服の補修の学習を通して —

大竹市立大竹中学校 馬越 幸子

研究の要約

本研究は、生活の中で活用できる技能を育成する家庭科学習指導の工夫について、特に衣服の補修に重点を置き考察したものである。文献研究を踏まえ本研究では、生活の中で活用できる技能を、基礎的・基本的な縫製の技術を習得した上で、補修の目的や状態に応じてよりよい方法を総合的に思考し判断しながら補修ができる能力と定義した。この技能を高めるために、生徒同士がつまづきを教え合う活動を通して、基礎的・基本的な縫製の技術を習得させる。そして、補修を必要とする衣服を使用し、補修する学習指導を行うことが有効であると考えた。そこで、第2学年の生徒を対象に、パフォーマンス課題を取り入れた衣服の補修の学習を通して、生活の中で活用できる技能を習得させる学習活動を行い、その技能に高まりが見られた。このことから、パフォーマンス課題を取り入れた衣服の補修の学習活動は、生活の中で活用できる技能を育成することに有効であるといえる。

キーワード：生活の中で活用できる技能 パフォーマンス課題 衣服の補修

I 衣服の補修の学習における現状と課題

中学校学習指導要領（平成20年）の技術・家庭（家庭分野）「C（1）衣服の選択と手入れ」の指導事項に「ウ 衣服の材料や状態に応じた日常着の手入れができること」¹⁾と示されている。このことについて、中学校学習指導要領解説技術・家庭編（平成20年、以下「解説」とする。）には、「衣服を快適に着用するために、（中略）衣服の状態に応じた適切な補修ができるようにする。」²⁾と示されている。さらに、「解説」では、「補修については、例えば、まつり縫いによる裾上げ、ミシン縫いによるほころび直し、スナップ付けなどを取り上げ、補修の目的と布地に適した方法を選び、実践できるようにする。」³⁾と示されている。

このまつり縫いに関しては、平成19年度特定の課題に関する調査（中学校）—技術・家庭（家庭分野）—（平成21年）の実技試験において、正しくできた生徒の割合は46.0%であった¹⁾。さらに、縫い目の長さなど七つの観点で評価した場合、全ての観点を満たしている生徒は全体の4.3%にとどまっており、まつり縫いの技術が定着していないことが分かる。速水多佳子・黒光貴峰（2014）の、小学校・中学校・高等学校で家庭科の学習を経験した大学生を対象とした調査結果によると、まつり縫いができる、できないという以前に、まつり縫いそのものが何かとい

うことすら理解できていない大学生が多いことが分かった²⁾。これらのことから、衣服の補修に関しての基礎的・基本的な縫製の技術が十分に習得されていないことが分かる。

また、衣服の補修の実践状況に関して、田中志穂・内田恵美子（2009）は、家庭科学習の定着度調査（中学校）の衣領域において、「スカートやズボンのほころびを直せる」という問いに対して肯定的な回答をした生徒は20%以下であったと報告している³⁾。速水・黒光による家庭での実践状況の調査では、自分で補修していると回答した者の割合が、ボタン付け58.0%、スナップ付け25.6%、まつり縫い25.8%であった。また、実践していない理由としては、「する機会がない」「誰かにしてもらおう」「方法がわからない」などを挙げている⁴⁾。所属校における実態調査では、「ズボンやスカートの裾がほころぶ」「ズボンの股やシャツの脇がほころぶ」「シャツのボタンが取れる」といった衣服の補修が必要な状態において、「誰かにしてもらおう」と回答した生徒が75.8%であった。その主な理由としては「上手にできる自信がない」43.6%、「方法がわからない」23.9%、「面倒」23.7%、「時間がない」7.1%などを挙げている。

これらのことから、衣服の補修に関して誰かに頼ろうとする実態は、衣服の状態に応じて適切な補修

方法や技能が身に付いていないことが主な要因だと考える。

そこで本研究で扱う衣服の補修の学習の課題には、次の二つと考える。一つめは、まつり縫いなどの、基礎的・基本的な縫製の技術が十分に習得できていないことである。二つめは、基礎的・基本的な縫製の技術を補修が必要な状況で活用できていないことである。

Ⅱ 研究の基本的な考え方

1 技術と技能の捉えについて

総合家庭科辞典（昭和54年）では、技術について「一定の目的を達成するための行動のしかたとその用具（方法や手段）を意味する」⁴⁾と述べている。また、技能について「客観的存在である『技術』が個人の能力として主体化されたものが『技能』である。技能はその技術についての知識・理解と、行動的に定型化して身につけている状態、すなわち運動的 skill (motor skill) の総合された能力である。」⁵⁾とし、技術と技能の違いを述べている。つまり、方法や手段についての知識や理解が土台となった上で、個人に身に付く総合的な能力を技能と捉えることができる。

2 生活の中で活用できる技能とは

実際の生活の中で生かすことができる能力について「解説」では、生活する上で直面する様々な問題の解決に当たり、今まで学んだ知識と技術を応用した解決方法を探究したり、組み合わせて活用したりすること、それらを基に自分なりの新しい方法を創造する能力であると示されている⁶⁾。西敦子(2005)は、家庭科で育むべき学力を生活実践力とし、これは「具体的な生活の場面で、生活の状況を認識し、積極的に人、物、ことに関わり、文脈に沿って思考し判断して行動化する能力」⁶⁾であると述べている。このことは、家庭科で育むべき能力の一つが、生活の中で状況を認識して、よりよい方法を思考し判断することで問題を解決していく能力だと考えられる。

石井英真(2015)は、学校で育てる能力の階層性を捉える枠組みとして認知システムを示している。この中で目指す学力・学習の質を三つのレベルに分け、それらを三重円モデルとして相互関係を示している。学力・学習の質の三つのレベルとは、①知識の獲得と定着「知っている・できる」レベル、②知識の意味理解と洗練「わかる」レベル、③知識の有

意味な使用と創造「使える」レベルである⁶⁾。この認知システムを、衣服の補修に当てはめて具体的に整理したものが図1である。

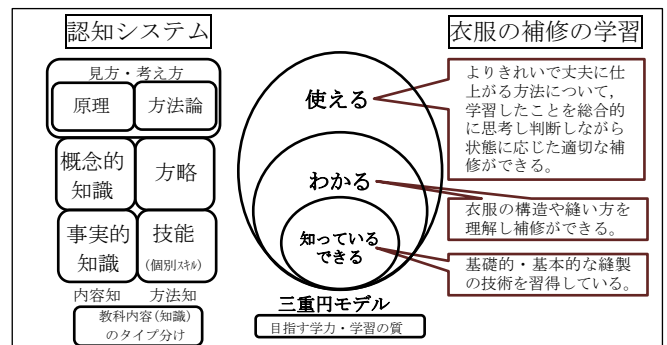


図1 学校で育てる能力の階層性を捉える枠組みとしての認知システムを衣服の補修の学習に当てはめたもの

「知っている・できる」レベルとは、基礎的・基本的な縫製の知識・技術である玉どめ、玉結び、まつり縫いなどの名称や方法を知っていたり、実際に作業ができたりすることと捉える。これを基礎的・基本的な縫製の技術とする。

「わかる」レベルとは、衣服は様々なパーツや素材で構成されており、そのパーツや素材によって縫い方やその手順などに違いがあるということが分かり、その補修ができると捉える。

「使える」レベルとは、既習事項を生かし、より丈夫できれいに仕上がる方法を総合的に思考し判断しながら、状態に応じた適切な補修ができる段階であり、これが生活の中で活用できる技能と捉える。

以上のことから、本研究では、衣服の補修において生活の中で活用できる技能を、基礎的・基本的な縫製の技術を習得した上で、補修の目的や状態に応じてよりよい方法を総合的に思考し判断しながら、補修ができる能力と定義する。

3 生活の中で活用できる技能が身に付いていない背景

前述したように、習得した基礎的・基本的な縫製の技術を生活の場の中で十分生かすことができていないという課題がある。

鈴木明子(2011)は、子供たちの生活実態と生活観についての調査結果から「子ども達は、多忙な生活の中、生活財や人への関わり方が表面的、消極的であり、さまざまな生活技能を習得する機会が少ない状況にある。」⁷⁾と述べている。また、川端博子・鳴海多恵子(2009)らが1995年と2007年に小学生

を対象とした糸結びテストを行った調査では、子供たちの手指の巧緻性の低下が顕著であったと報告されている⁽⁷⁾。これを、堀内かおる（2013）は「子どもたちの日常的な生活経験として、針と糸を扱う機会が激減しているという状況があるだろう。」⁽⁸⁾と分析している。

このように、子供たちの生活体験の不足が、生活の中で活用できる技能の習得と定着に大きな影響を与えていることが分かる。子供たちは、生活の中で縫製の技術を習得したり、衣服の構成や縫い方などについて理解したりする機会そのものが減少してきているため、授業の中で実生活を想起し、それにつながるような体験的な学習を行う必要があるといえる。

4 生活の中で活用できる技能を育成するために

(1) 基礎的・基本的な縫製の技術を習得させるために

生活の中で活用できる技能を育成するために、基礎的・基本的な縫製の技術を確実に習得させる必要がある。しかし、前述のとおり、その習得は十分ではなく、授業の在り方においても改善が必要であると考え。「解説」では、基礎的・基本的な知識及び技術は、実習や実践的・体験的な学習活動を通して習得させることを重視すると示されている⁽⁸⁾。

武藤八重子（1998）は、家庭科の実習の授業において様々な問題点を挙げ、その改善の方向性として、次の3点を挙げている⁽⁹⁾。

- ①技術と知識の結び付きを図ること。
②学習体験を確保すること。
③技術のハウ・ツウでなくその法則性を指導すること。

家庭科の実習の授業における改善の方向性

また、武藤は、③について、なぜその方法・やり方なのかという法則性を教師が問いかけ、友だちとの討論を通して生徒自身に模索や探究をさせる活動を設定することが望まれると述べている。つまり、基礎的・基本的な縫製の技術を確実に習得させるためには、単なる技術や知識の伝授ではなく、よりよい方法について理解をさせる活動を仕組んでいくことが大切であると考え。

これらのことを踏まえ、本研究では、基礎的・基本的な縫製の技術の習得を図るために次のような学習の展開をする。まず、実習の授業の中で、教師による見本と、生徒が縫ったものの縫い目を比較させ、

生徒自身によりよい方法について模索させその法則性について意見を出させる。次に生徒から出た意見とあらかじめ用意していたチェックリストを照らし合わせながら、評価の観点を確認した上で相互評価をし、つまずきを教え合う。これらの活動を通して、技術と知識を結び付け確実な習得を図る。

(2) 基礎的・基本的な縫製の技術を生活の中で活用できる技能に高めるためのパフォーマンス課題の必要性について

衣服の補修について、どのような教材を使用し、どのような技術を習得させているかを、各都道府県の教育センターなどがWeb上で公開している平成20年度～平成26年度の学習指導案を分析し、表1にまとめた。この表から、衣服の補修に必要な縫製の技術を、布を用いた物の製作を通して習得させていることが多いことが分かる。衣服を教材として補修の学習を行っているのはA校とE校の2校のみであった。A校は学校で着用しているワーキングウェアの手入れや補修を行っているが、洗濯する、アイロンをかける、ほつれを補修するなどを生徒が選択して実習を行っているため、補修をしたのは一部の生徒のみとなっている。また、E校は練習布で練習をした後、普段着を使用し、補修が可能かどうかの判断をする学習展開となっている。つまり、生徒全員が衣服の補修を行うという生活場面を意識した学習展開があまりみられないことが分かる。このことから、補修が必要とされる場面において、補修の目的と状態に応じたよりよい方法を思考し判断する学習機会も少ないと考えられる。

表1 衣服の補修に必要な縫製の技術の習得のために使用した教材

	使用した教材	縫製の技術			
		ミシン縫い	手縫い		
			まつり縫い	スナップ付け	ボタン付け
A校(長野)H20	ワーキングウェア	○			
B校(埼玉)H21	ランチョンマット	○			
C校(岐阜)H22	エコバック	○		○	○
D校(広島)H22	エプロン	○	○		○
E校(北海道)H23	練習布	○	○	○	
	普段着	○	○	○	
F校(新潟)H24	フックカバー	○	○	○	
G校(群馬)H25	練習布		○		
H校(茨城)H26	エコ巾着	○	○		

鈴木（2011）は、衣生活の学習について「日常の被服の活用や着実態を想起させ、その具体的な意識を捉えて授業を組み立てることが必要である。」⁽⁹⁾と述べている。河村美穂（2007）は、「子どもたちにとって生活にかかわる技能・技術は、生活の場面に関連したものが重要である。」⁽¹⁰⁾と述べている。

堀内（2013）は、現実の生活において出現する「リアルな課題」を子供たちの生活に即して提示し、その生活場面に直面したときのことを想起させて学習する重要性を述べている⁽¹⁰⁾。

さらに、西岡加名恵（2007）は、「パフォーマンス課題とは、学んだ知識やスキルをリアルな文脈の中で使いこなすこと（総合し応用して、表現したり実践したりすること）を求める課題である。」⁽¹¹⁾と述べている。

したがって、基礎的・基本的な縫製の技術を生活の中で活用できる技能に高めるために、補修の目的と状態に応じたよりよい方法を総合的に思考し判断しながら現実の生活場面を想起するようなパフォーマンス課題を位置付けた学習展開が必要であると考ええる。

Ⅲ 生活の中で活用できる技能を育成する学習の題材構成について

本研究で設定した題材は、第一次から第三次の三段階で構成する。第一次では、パフォーマンス課題に取り組みさせる。そのことで、自分の課題をメタ認知させ、題材末までにどのようなことができるようになるなければいけないかという見通しをもたせる。また、つまずきを教え合いながら基礎的・基本的な縫製の技術の確実な定着を図る。第二次では、第一次で学習した基礎的・基本的な縫製の技術を衣服の補修に生かすため、衣服の構造や縫い方の理解が促されるような指導を行う。第三次では、学習したことを総合的に思考し判断しながら補修を行うパフォーマンス課題に取り組みさせる。これにより、生徒は具体的な生活を想起しながら課題を発見し、それを解決していく中で生活の中で活用できる技能の育成が図られるものと考ええる。パフォーマンス課題の内容については図2に示す。

ズボンの補修をしよう

日曜日、家でテレビを観てくつろいでいると、先ほど出かけたはずの家族が困った顔をして帰ってきました。どうしたのか聞いてみると、バスに乗るために急いで道路を走っていたらつまずいて転んでしまい、お気に入りのズボンが破れてしまったというのです。家族はあなたに補修を頼んできました。次の条件を考えながら補修をしてあげましょう。

1 次のバスの時間に間に合わせるために、30分以内に仕上げる。

2 補修した部分が再び破れないように、丈夫に仕上げる。

3 補修した部分が目立たないように、きれいに仕上げる。

【注意事項】上記の3つの条件を考えながら補修をしてください。道具は以下のものがあります。使用するかしらないかは自分で判断してください。

<作業台に用意しているもの> ミシン、裁縫道具、ゴミ箱

<教卓に用意しているもの> アイロン、アイロン台、ミシン糸、ボビン、しつけ糸、手縫い糸

図2 パフォーマンス課題

Ⅳ 研究の仮説および検証の視点と方法

1 研究の仮説

- 生徒同士がつまずきを教え合う活動を設定すれば、基礎的・基本的な縫製の技術を習得させることができるであろう。
- 補修を必要とする衣服の状態を再現して補修を行えば、生活の中で活用できる技能を育成できるであろう。

2 研究の視点と方法

検証の視点と方法を表2に示す。

表2 検証の視点と方法

検証の視点	方法
生徒同士がつまずきを教え合う活動は、基礎的・基本的な縫製の技術の習得において有効であったか。	チェックリスト 自己評価表
補修を必要とする衣服を使用して補修する学習指導は、生活の中で活用できる技能の育成に有効であったか。	事前・事後アンケート プレ・ポストテスト ワークシート

Ⅴ 研究授業について

- 期 間 平成27年7月2日～平成27年7月15日
- 対 象 所属校第2学年（2学級34人）
- 題材名 補修の目的と布地に適した衣服の補修をしよう
- 目 標

衣服の補修に意欲的に取り組み、補修に必要な基礎的・基本的な縫製の技術を身に付け、補修の目的と状態に適した方法を理解し、適切に思考し判断して衣服の補修ができる。

- 指導計画(全6時間)

次	時	主な学習活動
一	1	パフォーマンス課題への取組 ・ズボンを補修し学習の見通しと課題意識をもつ。
	2	基礎的・基本的な縫製の技術の習得（既習事項の確認） ・提示された手縫いやミシン縫いの失敗例から、よりよい方法についてグループで意見を出し合い、全体で確認する。 ・生徒同士がつまずきを教え合いながら、チェックリストを使用し相互評価を行う。
	3	基礎的・基本的な縫製の技術の習得（まつり縫い） ・制服とジーンズの裾の違いを比較し、まつり縫いの特徴についてまとめる。 ・映像を観ながら、まつり縫いを行う。 ・まつり縫いをした布をグループの中で見比べ、よりよい方法について意見を出し合い、全体で確認する。 ・生徒同士がつまずきを教え合いながら、チェックリストを使用し相互評価を行う。
二	4	ズボンの構造や縫い方の理解 ・ズボンの小型のパーツを使用し、衣服の構造や縫う手順について知る。 ・様々な衣服を観察し、箇所による縫い方の違いやその理由を考え、衣服の構造や縫い方の理解を深める。 ・目的や状態に応じた適切な衣服の補修についてポイントをまとめる。
	5	衣服の構造や縫い方の理解 ・シャツとズボンの補修の共通点について考える。 ・簡単なシャツの補修を行う。
三	6	パフォーマンス課題への取組 ・学習したことを総合的に思考し判断しながら基礎的・基本的な縫製の技術を活用し、衣服の補修を行う。

VI
 研究授業の結果分析と考察

1
 生徒同士がつまずきを教え合う活動は、基礎的・基本的な縫製の技術の習得において有効であったか

第2時は、生徒が自分の課題を見だし既習事項の手縫いとミシン縫いが、確実に習得できるように指導した。まず、失敗例を提示し、その原因を考えさせることで、よりよい方法について理解させた。その後、生徒同士がチェックリストを基に相互評価をし、つまずきを教え合った。その結果を表3に示す。この活動では、ほぼ全員の生徒がB評価以上となり、C評価の生徒はボタン付けの1人だけであった。このことから、既習事項でのつまずきを確認し、それを意識しながら縫うことで、手縫いとミシン縫いの基礎的・基本的な縫製の技術の習得ができたと考えられる。

表3
 手縫いとミシン縫いの基礎的・基本的な縫製の技術の習得学習におけるチェックリストの結果

チェックポイント		評価 (人)		
		A できた	B 教え合い 後できた	C できなかった
玉結び	やり方	34	0	0
	出来ばえ	32	2	0
玉どめ	やり方	33	1	0
	出来ばえ	33	1	0
ボタン付け	やり方	29	5	0
	出来ばえ	24	9	1
ミシンの糸セット	上糸セット	33	1	0
	下糸セット	34	0	0
	下糸の引き出し	34	0	0
	上糸と下糸が押さえの下から揃って出ている	33	1	0
縫い方	縫い始めは針をおろしてからスタートしている	33	1	0
	最初と最後は返し縫いをしている	34	0	0
	まっすぐ縫えている	29	5	0
	角を縫う時は、針をおろして角度を変えている	32	2	0

また、チェックリストの下段には、ペアの生徒へのアドバイスを記述する欄を設けた。お互いに相手が気付かなかった点についてアドバイスをし合い、自分の課題を明らかにすることができたと思う。

- 玉結びが大きめだったので、中指をおさえる時にもう少し力を入れてギュッとしたら小さくなるのでやってみてください。
- ミシン縫いはまっすぐ縫えているし角を曲がる時の順序もちゃんとできていて、きれいな仕上がりでした。時々、返し縫いを忘れていることがあるので意識してやればOKだと思います。

生徒同士のアドバイスの記述（下線は稿者による加筆）

また、授業後の振り返りでは、基礎縫いのポイントについて気付くことができたようになったという記述が多く見られ、基礎的・基本的な縫製の技術の確実な習得を図ることができたと思う。

- 今まで、玉どめや玉結びであやふやなところがあったけど、きちんとできるようになってよかった。
- 角を縫う時は針をおろして布を回すことが大切だと分かりました。これで基礎縫いは完璧にできるようになったと思います。

生徒の振り返りの記述（下線は稿者による加筆）

第3時のまつり縫いの習得では、実際にまつり縫いを行かせた後、つまずきの原因やよりよい方法について意見を出し合わせ、そのポイントをまとめさせた。生徒から出たポイントとあらかじめ用意していたチェックリストとを照らし合わせながら、評価の観点を確認した上で相互評価をし、つまずきを教え合った。その観点を位置付けたチェックリストが図3であり、それを評価する判断基準が表4である。なお、つまずきを教え合う活動前後の評価の結果が図4である。

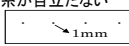
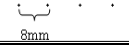
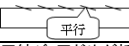
チェックリスト		評 価		
① 糸の取り方	一本取りで縫っている	A できている	B 途中から二本取りになっている	C 二本取りで縫っている
② 表側の縫い目	糸が目立たない 	A 目立たない	B ところどころ目立つところがある	C 全体的に目立つ
③ 表側の縫い目の間隔	8mm 程度 	A 8mm 程度の間隔で縫えている	B 広くなったり、狭くなったりしているところがある	C 全体的に広すぎたり、狭すぎたり、ばらつきがある
④ 表側の縫い目の形	裏の形が斜めになっている 	A 斜めになっている	B 形が乱れているところがある	C 全体的に形が乱れている
⑤ 結び目の位置	玉結び・玉どめが折り目の内側にある	A 両方内側にある	B 片方だけ内側にある	C 両方外側にある
⑥ 全体の仕上がりが	引きつりがいい	A 全体的に引きつりがいい	B ところどころ引きつりがいい	C 全体的に引きつっている

図3
 まつり縫いのチェックリスト

表4
 チェックリストを基にしたまつり縫いの判断基準

評価	
A+	①～⑥の観点で全てA
A	②⑥の観点がAであり、かつ、Aが5観点以上、残りの観点がB
B	総合評価のAを満たしていないが、全ての観点がB以上
C	まつり縫いをしているが、Cの観点が1観点以上
D	まつり縫いができていない

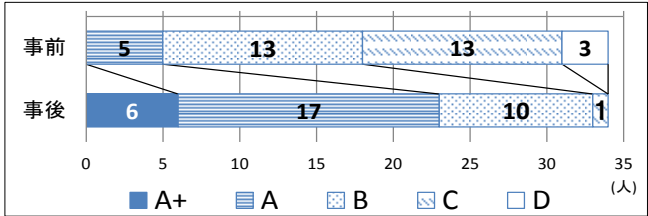


図4
 つまずきを教え合う活動前後の評価の結果

事前の評価では概ね満足できるとするB評価以上の生徒が18人だったが、つまずきを教え合う活動後は、33人に増加した。また、A評価以上の生徒も5人から23人に増加している。これは、手縫いやミシン縫いと同様に互いに教え合うことにより細かい点

を意識しながらまつり縫いをすることで、技術が向上したと考える。

次に、事前・事後に行った基礎的・基本的な縫製の技術の習得に関する意識調査の結果を図5に示す。

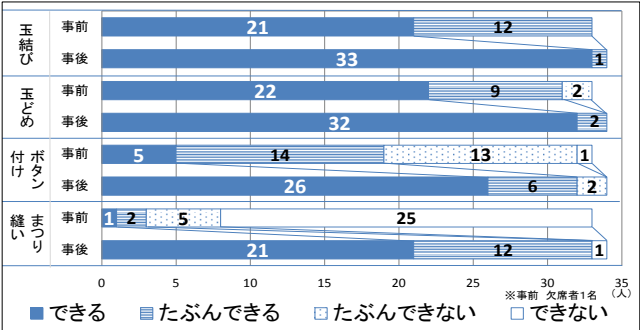


図5 基礎的・基本的な縫製の技術の習得に関する意識調査の結果

この結果より玉結び、玉どめ、ボタン付け、まつり縫いの習得に関して34人（90%以上）の生徒が肯定的な評価をした。

これらのことから、よりよい方法について理解を深めさせた上で、生徒同士がつまづきを教え合う活動は、基礎的・基本的な縫製の技術の習得において有効であったといえる。

2 補修を必要とする衣服を使用し、補修を行う学習指導は、生活の中で活用できる技能の育成に有効であったか

(1) パフォーマンス課題への取組の結果より

第1時と第6時に、パフォーマンス課題に取り組み、その変容を分析した。パフォーマンス課題は、ズボンの股上の縫い目と、裾のまつり縫いがほどこしている状態となっており、ループリックを基に股上と裾を評価した。また、パフォーマンス課題取組後は、提示された条件を満たして補修するために思考し判断したことをワークシートに記述させた。そのワークシートを図6に、ループリックを表5に示す。

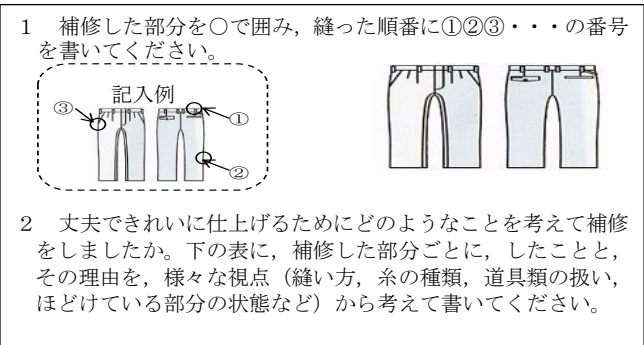


図6 パフォーマンス課題取組後のワークシート

表5 ループリック

観点		技能
具体的な評価の観点		補修の目的と布地に適した方法を選択し、丈夫できれいに補修ができている。その際、次の①②③を満たしている。 ① 補修の目的と布地に適した方法で補修ができている。 ② 日常の動作で簡単にほどこけないよう丈夫に縫われている。 ③ 縫い目が整っており、衣服の表・裏のどちらから見てもきれいに仕上がっている。
評価	A+	①②③を満たし、非常にきれいな縫い目で、丈夫に仕上げる工夫がされている。
	A	①②③を十分満たし補修ができている。
	B	縫い目が多少乱れているところはあるが、①②③を概ね満たし補修ができている。
	C	補修の目的と布地に適した方法で補修をしているが、縫い目が目立つ、引きつりがある、糸が目立つなど、見た目の悪い点がある。または、少しの力で簡単にほどこしてしまうなど、丈夫さに欠ける。
	D	裾をミシンで縫う、表裏を間違えるなど、補修の目的と布地に適さない方法で補修している。または、補修の途中である。
	E	縫えていない。
観点		思考・判断
具体的な評価の観点		補修の目的と布地に適した丈夫できれいに仕上げる方法を思考し判断したことその理由を明確にして、次の4つの視点で記述できている。 ① 縫い方（ミシン縫いとまつり縫いの区別をする。裏返して中表で縫う。） ② 糸の種類（布地の色と似た色の糸を選択する。） ③ 道具の扱い（チャコペン、まち針、アイロンなどを適切に使用する。） ④ ほどこしている部分の処理（もとの縫い目に1～2cm重ねて縫う。ほどこしている部分の糸を始末する。）
評価	A+	①～④の視点で、適切に思考し判断したこととその理由を明確に記述している。さらに、自分なりに考えて工夫したことが記述できている。
	A	①～④の視点で、適切に思考し判断したこととその理由を明確に記述できている。
	B	適切に思考し判断したこととその理由を明確に①～④の中で三つ記述できている。
	C	適切に思考し判断したこととその理由を明確に記述できていない視点が①～④の中で二つある。
	D	①～④の視点で、適切に思考し判断したこととその理由を明確に記述できていない視点が三つある。
	E	記述できていない。

第1時と第6時における、股上の補修の技能評価を表6に、裾の補修の技能評価を表7に、補修後のワークシートの記述した内容についての思考・判断の評価を表8に示す。

表6 股上の補修の技能評価

第1時 第6時	A+	A	B	C	D	E	計(人)
A+	0	3	0	2	1	0	6
A	0	2	0	8	3	2	15
B	0	0	0	3	3	0	6
C	0	0	0	3	4	0	7
D	0	0	0	0	0	0	0
E	0	0	0	0	0	0	0
計(人)	0	5	0	16	11	2	34

表7 裾の補修の技能評価

第1時 第6時	A+	A	B	C	D	E	計(人)
A+	0	0	0	0	0	1	1
A	0	0	0	0	4	6	10
B	0	0	0	0	2	8	10
C	0	0	0	0	0	7	7
D	0	0	0	0	0	0	0
E	0	0	0	0	0	6	6
計(人)	0	0	0	0	6	28	34

表8 思考・判断の評価

第1時 第6時	A+	A	B	C	D	E	計(人)
A+	0	0	1	1	0	0	2
A	0	0	1	5	1	0	7
B	0	0	0	11	5	0	16
C	0	0	0	4	4	0	8
D	0	0	0	0	1	0	1
E	0	0	0	0	0	0	0
計(人)	0	0	2	21	11	0	34

パフォーマンス課題への取組の結果、概ね満足できるとするB評価以上の生徒の人数は、股上の補修の評価では5人から27人に、裾の補修の評価では0人から21人に、思考・判断の評価では2人から25人に増加した。第1時の行動を観察すると、生徒全員がまず股上の補修から開始し、その後、時間に余裕のある生徒が、裾の補修を行っていた。しかし、股上の補修方法が分からず試行錯誤を繰り返しているうちに時間切れとなった生徒は28名で全体の82%にものぼり、ほとんどの生徒が裾の補修に進めないまま終わった。また、股上の補修を表から縫った生徒が13人、裏から縫っていても、正しい縫い位置が分からない生徒が7人おり、全体の59%の生徒が衣服の構造が理解できていないために正しい補修ができなかったと考えられる。衣服の構造や縫い方の違いについての学習を行った後、第6時でもう一度、パフォーマンス課題に取り組ませた。股上の補修では、全員が縫う手順は正しく思考し判断しながら補修ができていた。特に、30分という時間制限の中でより速く仕上げるために、時間のかかるしつけよりもまち針をうってから本縫いをするなど、第1時では見られなかった行動が多く見られた。しかし、C評価

の7名は、縫う位置は正しいが、ミシンで縫う際に下の布を巻き込んで縫うなどしていたためB評価に至らなかった。裾の補修に関しては、補修にとりかかることができた生徒が、6名から28人に増加した。しかし、そのうちのC評価の生徒7名は、まつり縫いをしているが、きれいに仕上げることに課題があった。また、E評価の6人は、第3時でのまつり縫いの技能評価では、A+評価が1人、A評価が4人、B評価が1人となっている。これは、股上の補修で時間がかかり裾の補修には至らなかったが、時間制限がなければ補修できたのではないかと考えられる。

(2) 生徒の感想より

第4・5時学習後の感想には、生徒自身が衣服の構造や縫い方についての自分の課題をメタ認知し、よりよい補修の方法を思考し判断できるようになり、第6時のパフォーマンス課題への取組に生かしていこうとする記述が多く見られた。

- 今日の授業では、前回縫った時の反省点がよくわかりました。次回の補修ではよりきれいに補修ができそうです。
- 衣服の補修は、よく考えてみるととても簡単に補修できるんだということがわかりました。丈夫できれいに仕上げるためにいろいろな工夫もわかり、最後の補修の時は忘れないようにしたいと思います。

第4・5時学習後の生徒の感想（下線は稿者による加筆）

また、第6時学習後の感想では、生徒全員が学習後は自分の成長を実感できたことを記述していた。そのほか、約6割の生徒が普段の生活の中でも生かしていきたいとし、それ以外の生徒も、もっと練習をして衣服の補修ができるようになりたいといった前向きな記述をしていた。

- 初めて縫った時は縫い方もわからなくて下手だったけど、最終的にはとても上手に縫えるようになって良かったです。この6時間で学んだことを生かして普段の生活で服を補修する時に役立てたいです。
- 一番最初に比べたら、上手に衣服の補修ができるようになったのでよかった。時間制限とかがあって大変だったけど、最後は自分で補修ができたのでとても嬉しかった。これからは自分で直していきたい。

第6時学習後の生徒の感想（下線は稿者による加筆）

これらのことから、生徒は第6時の取組では学習したことを生かして衣服の補修ができたことを実感しており、更に、それを実生活に生かしていこうとする意欲もみられるようになった。これは、第1時でパフォーマンス課題を設定したことにより、課題意識や見通しをもって主体的に取り組めたからだと考えられる。

(3) 事前・事後アンケートの結果より

衣服の補修が必要になった場合の対応について、図7に示す。

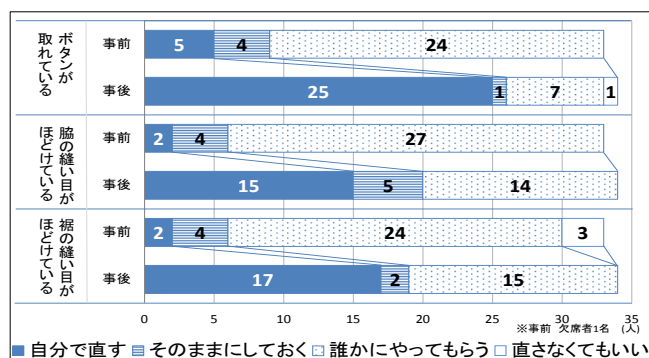


図7 衣服の補修が必要な状態における対応

衣服の補修が必要な状態において、「自分で直す」と回答した生徒は、「ボタンが取れている」場合は5人から25人に、「脇の縫い目がほどけている」場合は2人から15人に、「裾の縫い目がほどけている」場合は2人から17人へと増加しており、衣服の補修を自分でしようとする意識の高まりが見られた。しかし、依然として「誰かにやってもらう」と回答した生徒のうちの約8割は、その理由を「上手にできる自信がない」と回答しており、生徒一人一人に自信をもたせるまでには至らなかったと考える。今後、こうした指導を継続するとともに、身に付けた技能を使う場を意図的に設定していくことが必要である。

(1) (2) (3) のことから、補修を必要とする衣服を使用し、補修を行う学習指導は、生活の中で活用できる技能を育成することに有効であった。

Ⅶ 研究の成果と課題

1 研究の成果

生徒同士が互いにつまづきを教え合う活動は、基礎的・基本的な縫製の技術の習得に有効であることが分かった。

また、題材の最初にパフォーマンス課題に取り組ませることで、生徒に課題意識や見通しをもたせながら学習を進めていくことができた。さらに、題材末に学習したことを総合的に思考し判断しながら補修を行うパフォーマンス課題に取り組ませることで、生活の中で活用できる技能を育成することができた。これらのことから、補修を必要とする衣服を使用し、補修を行う学習指導は、生活の中で活用できる技能を育成することに有効であることが分かった。

2 今後の課題

事後アンケートでは、衣服の補修を自分でしないと回答した生徒の大半は、その理由を「上手にでき

る自信がない。」としており、この生徒たちは、パフォーマンス課題取組後の技能と思考・判断の評価が低い傾向にあった。生徒一人一人に自信をもたせる学習指導や、パフォーマンス課題の内容について更に研究を進め、身に付けた技能を使う場を意図的に設定していく必要がある。

【注】

- (1) 文部科学省（平成21年）：『平成19年度特定の課題に関する調査（中学校）-技術・家庭（家庭分野）-』に詳しい。
- (2) 速水多佳子・黒光貴峰（2014）：「大学生の家庭科における調理、被服製作の知識・技能の習得状況にみる課題」『日本家庭科教育学会誌第57巻第1号』 p.17に詳しい。
- (3) 田中志穂・内田恵美子（2009）：「家庭科学習の定着度」『教育実践総合センター研究紀要 No.19』 pp.53-59に詳しい。
- (4) 速水多佳子・黒光貴峰（2014）：前掲書 p.17に詳しい。
- (5) 文部科学省（平成20年）：『中学校学習指導要領解説技術・家庭編』教育図書 p.12を参照されたい。
- (6) 石井英真（2015）：『今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影—』日本標準 pp.20-30を参照されたい。
- (7) 川端博子・鳴海多恵子（2009）：「小学生の手指の巧緻性に関する研究—遊びと学習面からの一考察」『日本家政学会誌60(2)』 pp.123-131に詳しい。
- (8) 文部科学省（平成20年）：前掲書 p.12
- (9) 武藤八重子（1998）：『家庭科教育再考』家政教育社 pp.159-160を参照されたい。
- (10) 堀内かおる（2013）：『家庭科教育を学ぶ人のために』世界思想社 p.170を参照されたい。

【引用文献】

- (1) 文部科学省（平成20年 a）：『中学校学習指導要領』東山書房 p.101
- (2) 文部科学省（平成20年 b）：『中学校学習指導要領解説技術・家庭編』教育図書 p.61
- (3) 文部科学省（平成20年 b）：前掲書 p.61
- (4) 日本家庭科教育学会（昭和54年）：『総合家庭科辞典』同文書院 p.162
- (5) 日本家庭科教育学会（昭和54年）：前掲書 p.174
- (6) 西敦子（2005）：『生活実践力を育成する家庭科授業の創造』明治図書 p.24
- (7) 鈴木明子（2011）：『教育実践力をつける家庭科教育法〔第3版〕』大学教育出版 p.31
- (8) 堀内かおる（2013）：『家庭科教育を学ぶ人のために』世界思想社 p.76
- (9) 鈴木明子（2011）：前掲書 p.139
- (10) 河村美穂（2007）：『シリーズ生活をつくる家庭科 第1巻 個人・家族・社会をつなぐ生活スキル』ドメス出版 p.41
- (11) 西岡加名恵（2007）：「『逆向き設計論』にもとづくカリキュラム編成—中学校社会における開発事例—」『教育目標・評価学会紀要第17号』 p.17